日應 小城の歴史

皇室と芦刈の江口家

岡本　澄雄

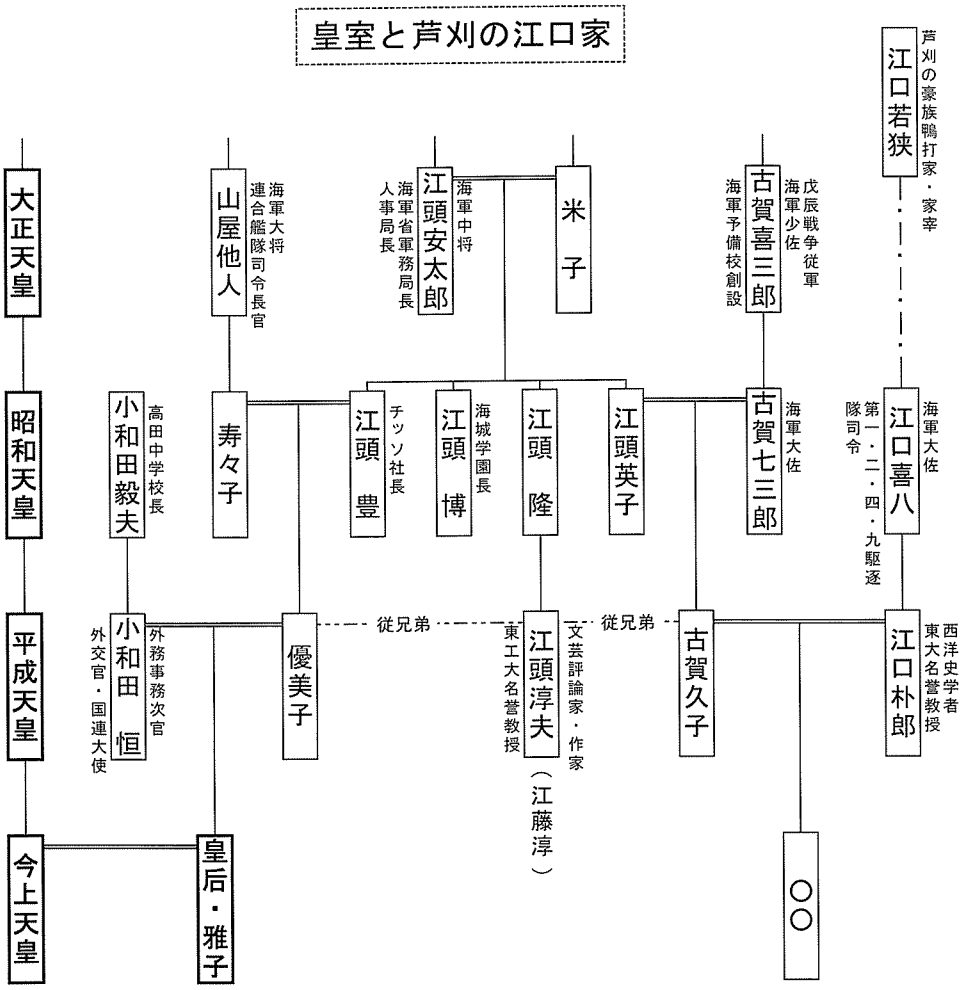
芦刈町史第三章　郷土の先輩たち・軍関係「江口喜八」という人物について、簡単に一行の記載がある。内容は『江口喜八、海軍大佐、郷土出身軍人の長老格。後進の誘掖（えきゆう）に努む。藤沢市（神奈川県）に居住健在』と。この人物を過去（先祖）と未来（子孫）について掘り下げてみたい。

芦刈町内で数多くある苗字の中で一番多い苗字（姓）は「古賀」で、次に「森永」が続き、「江口」は九番目に多い。江口姉は下古賀地区に偏っているが一部新村にも存在している。その理由は干拓により干潟が徐々に開墾されて農地として耕作するようになったことにより下古賀の人々は移住や分家により南の新村に住み着いてきたものと考えられる。

今から四〇〇年以上前の戦国時代芦刈には「徳島」と「鴨打」氏が町を二分して五州二島の太守と仰がれていた龍造寺隆信に終生仕えた「鴨打陸奥守胤忠」の家臣に「江口若狭」という人物がいた。「江口若狭」は鴨打家のなかでも股肱（ここう）の家臣（「日将居士略譜」では家宰（かさい））の一人でもあって、幾多の合戦に出陣し鴨打家を支えてきた。とりわけ元亀元年大友氏が佐賀城攻略のために肥前に出陣した時、それを迎え撃った所謂「今山の戦い」その後の「梶峰城の戦い」等において活躍したことが記録に残されている（『歴代鎮西誌』上巻）。その子孫は鴨打家が小城藩士となって小城に居を移した後は、地元芦刈町下古賀に居を構え代々素封家として農業を営んできた。

末裔の江口喜八は芦刈村下古賀で生を受け、佐賀中学校卒業と同時に海軍を志願、明治三十八年海軍兵学校（第三三期）を卒業（同期に豊田副武大将等）、のち駆逐艦灘風艦長（大正十年一月二十九日から大正十二年十二月一日や第九・第四・第一・第二駆逐隊司令

皇室と芦刈の江口家



（大正十二年十二月一日から昭和四年）を歴任し、その間昭和二年大佐に昇進し、幾多の戦いに参戦し昭和五十七年二月二十八日藤沢市にて歿。

子息に昭和時代の歴史学者で有名な「江口朴郎」がいる。朴郎は明治四十四年三月十九日芦刈村下古賀で生まれ昭和八年東京帝国大学文学部西洋史学科を卒業。第一高等学校教授などを経て、昭和二十八年東京大学教授となり、国際関係論科及び大学院国際関係論課程の主任を務めた。のち法政大学、津田塾大学で教鞭をとった。初期には第一次世界大戦前の外交史を研究したが、第二次世界大戦敗戦後は現代史の諸領域にわたり、帝国主義を反帝国主義諸勢力との対抗関係において国際的視野からとらえることを提唱した。また歴史学の課題と方法について柔軟なマルクス主義的見地からしばしば発言、学会に多大な影響を与えた。

歴史学研究会委員長、日本学術会議委員、国際関係研究所長、原水協代表委員、日本ラオス友好協会会長などを務めるかたわら、多くの著書を著し、歴史学の叢書・全集の編纂を手がけた。

朴郎の妻（久子）は、父・喜八の三期後輩である佐賀郡北川副村古賀（現佐賀市）出身の海軍士官古賀七三郎（海兵三六期）大佐の娘で、著名な作家であり文芸評論家でもあった江藤淳（本名江頭淳夫）の従兄弟にあたる。

皇后雅子の母優美子の生家江頭家は佐賀藩士の家系で祖父安太郎は海軍中将まで昇りつめた軍人である。安太郎の子：豊は東大を出て日本興業銀行に入り、常務まで勤めて新日本窒素（現チッソ）に転出。昭和三十九年に社長に就任し水俣病闘争・訴訟の矢面に立った（昭和四十六年に会長）。豊の岳父（妻寿々子の父）は連合艦隊司令長官などを歴任した山形県出身の山屋他人海軍大将である。

甥（長兄隆の長男）にあたるのが平成十一年七月自ら命を絶った文芸評論家で東工大名誉教授の江藤淳（本名江頭淳夫）が記憶に新しいのではないだろうか。早く死に別れた生母を思い求めることに始まり、一族のさまざまな生き方、在り方、時代、社会、歴史との関りにおいて捉え、言葉の高い緊張の世界に、鮮やかに凝集した力作「一族再会」を思い出さざるにはいられない。

母優美子は小和田恒に嫁ぎ皇后となった雅子他二女をもうけた。小和田恒は一九五五年外務省に入省し、外務事務次官や国際連合日本政府代表部特命全権大使等を歴任した。係累には元東大教授の歴史学者江口朴郎、元野村証券副社長増田健次などがいる。

（芦刈町三王崎居住）

「日峰様御咄之書」にみる直茂伺候の家臣

田久保佳寛

小城藩初代・二代藩主を祀る岡山神社所蔵（小城市立歴史資料館寄託）の「日峰様御咄之書（茂宅聞書）」（『佐賀県近世史料第八編第二巻』佐賀県立図書館）は、鍋島直茂（日峰）が家臣の深堀茂宅に語った話を、茂宅が書き留めたものである。巻末の記述によれば慶長一三年一二月、病中に鍋島茂里、七左衛門（茂賢）に宛てて書いている。

筆者の深堀茂宅（純賢〈すみまさ〉）は天文六年（一五三七）生まれで長崎深堀の領主だったが豊臣秀吉の九州侵攻の後、鍋島直茂に属した。茂宅の妻、男子が早く亡くなっていたことから、直茂の勧めで、家臣石井信忠の未亡人とその子七左衛門を深堀家に迎えた。七左衛門の兄が茂里で一時直茂の養子となり、後に横岳家を継ぐ。「茂宅聞書」は深堀茂宅が義理の息子に宛ててまとめた、直茂の語録ということになる。

日峰様御咄之書

「葉隠聞書」では、鍋島直茂に関する話は、三巻に書かれている。冒頭には、「此一巻は直茂公御話、茂宅聞書、柴田聞書、御代々聞書にこれなき事を書附け申候なり」とあり、直茂の話を知るための書物として知られていたことがわかる。文中に年年という記載があり慶長一三年以前の直近の年ということで慶長一一年に比定することが出来る。天文七年生まれの直茂と同時代に生きた人物の聞書であり、場所、同席した人物が分かる点や、年月日が分かる点でも史料的価値が高いと言える。

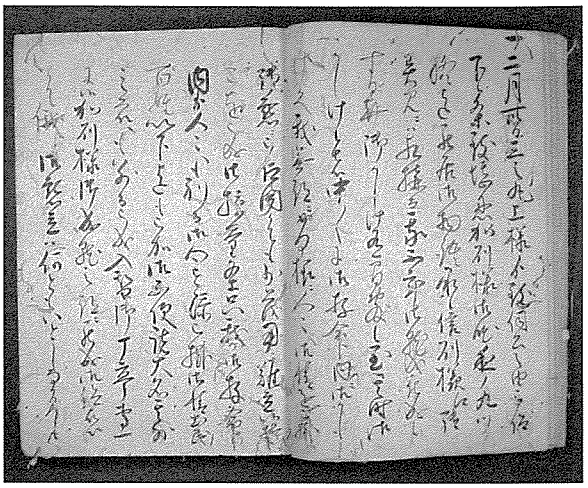
実際に直茂は、家臣を呼んで話をしていたようで、「葉隠聞書」三九一には

直茂公御やすみなされ候時は、次の間にて、古老の勇士共罷り在り、茶たばこを下され、寄合話仕り候様に仰付けられ、間越に御聞き成され、御不審の事は御問答成され、御聞寝入り遊ばされ候由

とあり、寝所の傍に集めた家臣に昔話を語らせ、時には話に加わることもあったようである。

茂宅が伺候した日時、場所、同席した人物は次のとおり。

二月五日、御東、東嶋市之介、諸隈兵庫、（諸）掃部
二月一七日九ツ迄、御東
二月二四日九ツ迄、御東、東嶋市之介、後藤茂綱（武雄鍋島）、多久安順、（成富か）十右衛門、鍋島五郎兵衛
二月二九日三之丸
二月三〇日九ツ迄、三之丸
三月二日夕飯
三月六日早朝、多久茂富、七左衛門
三月一七日二之丸
三月一八日（御東から猫を連れてくる）
三月一九日朝御数寄座書院、掃部、後藤茂綱、多久安順、同茂富、三浦四郎右衛門、葉次右衛門、持永助左衛門
同日夜、後藤茂綱、諫早直孝
三月二一日夜
三月二三日助太郎
三月二五日、諸熊兵庫、多久茂富
三月二六日朝
三月二七日
三月二八日
四月八日多久安順、同茂富、七左



一〇日
二三日

二月から六月の間に頻繁に呼ばれており、一日の内に朝と夜呼ばれることもあった。話し相手として茂宅は適任だったのだろうか。二月一七日の文には「（直茂から）話す中で自分の意見を少し織り交ぜて言う者が良い者達である、と言われ出仕する時の気遣いが増す」ということを書き記している。

同席した人物は、後藤（武雄）、多久、諫早などの龍造寺一族や、成冨十右衛門（茂安）が確認できる。東嶋、三浦、葉、持永は後に元茂に譲られる家臣である。

小城鍋島家は、元和三年（一六一七）祖父直茂、父勝茂から領地と家臣を譲り受け分家した。

「元茂公御年譜巻之一」（『佐賀県立図書館）によれば、「直茂公御隠居の侍八十三人、元茂公へ御譲り成られ候、姓名別記有」とあり、直茂の家臣八十三人が分家の際直茂から譲られ、小城鍋島家に属した。中には、側近くに仕える家臣も含まれていたことがわかる。

（三日月町久米居住）

衛門
四月一一日御数寄書院、掃部、伯庵、朝倉久左衛門、深江、宗之
四月一二日奥座、多久安順、七左衛門
四月一六日鍋島茂里
四月二〇日
四月二三日諸掃部、朝倉久左衛門
四月二八日、五月二日朝蓮池、東嶋市之介、十右衛門
五月三日
六日
一四日三之丸
一七日三之丸
五月一八日東嶋、掃部
五月二四日三之丸、多久茂富、大隈茂隆
五月二八日
六月一日
七日三之丸

小城郡と江原石見守一族

東　統禅

一、江原石見守

龍造寺隆信の好敵手だった三瀬の神代勝利は、若いころに小城の東千葉興常に仕えていた。その時に江原石見守が同じ部屋に起居していて、江原から吉夢を買い求めた勝利公がのちに山内の盟主になったと「神代家伝記」にある。『九州治乱記』には、「江原は武勇は勝れしかども、生得愚かなる男にて善悪わからざりしかば、おのが災いを除く上にかんざしを得るよと悦びて、すなわち夢をば売り渡しける」ともある（『九州治乱記』一七二頁）。

勝利は小城郡北部の山岳地帯も勢力下におき、長く龍造寺隆信と戦った。江原石見守は剛勇の武人として神代勝利の側近くに仕えた人物である。

二、千葉家の家臣時代

「神代家伝記」には、「江原石見守は生国は武蔵にて平姓なり。父を丹後利重と云う。石見初めて西国に来りて千葉家に仕ふ。千葉衰えてのち当家（神代家）に来たり三百石を賜わり筑前国怡土郡に住す。江原喜左衛門、江口新助、江口平兵衛の祖（先）なり」。「新次郎（神代勝利）若年の頃、小城郡司（東）千葉屋形興常に奉公しけり。さればその頃、興常の家臣に江原石見守という者あり。生国は武蔵の者にて榎原党なり」とある。

神代勝利が千葉興常に仕えていたのは大永年間（一五二一～一五二八）である（「神代家伝記」）。

天文十四年四月筑後に亡命していた龍造寺剛忠が帰還し、小城祇園城（千葉城）にいた宿敵の馬場頼周を急襲した。白石に遁れていた西千葉胤勝も共に攻め寄せた。「千葉胤勝の家人矢作左近将監・江原石見守かねて（城内の）案内を知りしかば、水の手より忍び入り、城に火をかけ焼立つ」（「神代家伝記」）。これにより祇園城は陥落する。江原石見守はかつて東千葉氏に仕えて城内をよく知っており、この時には西千葉氏に仕えていた。なおこの戦いで小城の城下町は灰燼に帰し、その復興は小城藩成立まで待たねばならなかった。

江原石見守は金敷峠と川上の戦いでその名が出てくるが、川上戦では一番槍を打つも戦には敗れ、神代長良を遁そうとして生け捕りとなり「下於保村にて斬られし時、敷革よりつっと立ち上がって太刀取りを蹴り倒し、喉笛を喰らい切りける」（『九州治乱記』一九四頁）。

三、江原氏起源考

○江口家伝承

子孫の江口平兵衛の系統は三日月の江口に知行を与えられ居住した。ご子孫（博多在住）の伝承によれば、「（足利）義視様の逸族にして源氏譜代の老臣となり、五千石を領せし処、永正中（一五〇四～一五二一）に所領召し上げられ、家伝記・御朱印（朱印状か）など邸宅と共に亡失せり。その裔丹後守利重その子石見守利貞と生国武蔵より来り、千葉氏に属し、筑前国怡土郡江原城主となり壱万石を領す。千葉氏おとろえて神代氏に寄寓す。その子林仙（平兵衛の父）にいたり鍋島家に奉仕仕り物成百石江口ヶ里知行仕り候。依て氏を江口とあらたむ」。

○菅原姓　江原江口系図（「小城鍋島文庫」）

菅原姓の東坊城茂長を祖とし江原丹後守和重につながる系図が二通存在する。

江原丹後守和重―石見守重澄―重正（平右衛門）―重次―重利（江口平兵衛）

※重次の条「依三根郡江口住・山辺内蔵允成江口・山辺丹後守家督」。弟は三人が江口姓。

※重次の兄弟に江原喜右衛門。

そして和重の条には「従武州初而下向或曰東坊城茂長四男秩父氏之子家依有養子依之号菅原姓」（和重が武蔵から佐賀にはじめて来住した。東坊城茂長の四男（の子

孫？）が秩父氏の家に養子となり、菅原姓を名のった）と言う者もいると書かれている。

○平姓渋谷榎原系図

この系図は、将門の孫である平将常より始まり、子の武基の条には「秩父別当　謀反に依り配流とある」。十三代目の渋谷朝直の兄弟の笙益の条に「武州依榎原住子孫号榎原」とある。そして系図の最後は、「利重　武州より下向し江原と号す―胤重（石見守）―平右衛門　左近太夫」で終わっている。

○江原石見守（元武州侍・筑前西分住と注記）から孫までの系図もあり、子は同平右衛門、孫は江原平太輔・源右衛門・太郎左衛門・内蔵之允とある。

四、秩父氏

父が和重か利重か、また平姓（「神代家伝記」）か榎原党（『九州治乱記』・系図）か菅原系か、足利義視の逸族（ご子孫伝承）・菅原姓（系図）、また石見守に「胤」の一字があるなど様々なちがいがある。しかし武蔵から父と共に来住したという点、さらに菅原姓系図・平姓渋谷系図とも『秩父』という点で共通している。じつは歴史的に渋谷氏は途中から秩父氏を名のっており、基家の代には今の品川区の荏原（えはら）郡を知行し、そこから橘樹（たちばな）郡小机郷、河崎郷（現川崎）までを領有した。しかも渋谷氏の通字は「重」であり、江原石見守の子孫が「重」を用いた事にも通じる。記述が様々ある以上は先祖について明確な伝承は途絶えていたのだろうが、それでも「秩父氏」という伝承はあったと判る。江原石見守の先祖は渋谷系だったのだろう。

江口家伝承は、石見守の父の名を「裔」丹後守としている。この覚書では「候」も人偏・縦線を略して「ユ矢」（一文字）と記しており、「裔」も「橘」の略字だったのだろう。渋谷一族が武州（武蔵国）の荏原（えはら）郡・橘樹（たちばな）郡を根拠地とした事を考えるなら、渋谷一族の支族が領地にちなんで江原（荏原）や橘を名のるのは自然である。

＜武蔵国南部の郡＞

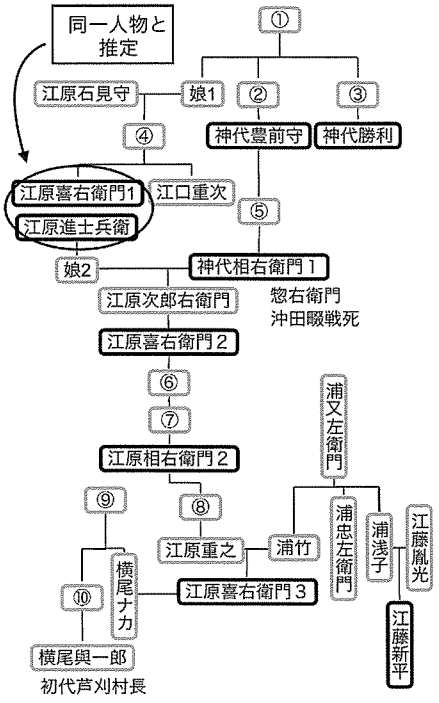
橘樹郡の小机城は長年の関東戦乱で文明十年（一四八九）に太田道灌に攻め落とされ廃城となり、再建は北条氏による大永四年を待たねばならなかった。永正七年には北条早雲に呼応するも、権現山城の戦いで上杉朝良により鎮圧されており、近隣には豊嶋氏などの渋谷氏系の武将もいた。江原石見守の肥前下向は、諸書の通りに関東の戦乱と関係があったのだろう

五、江原喜右衛門

先に「神代家伝記」には「江原石見守は江原喜左衛門の祖（先）」と書かれていると記した。ところで後代の江原喜右衛門２・３は実は神代勝利の一族の神代豊前守の子孫であった。かつて天文十四年一月馬場頼周の陰謀のときに城原で龍造寺一族を討ち取った武人である。豊前守の孫の神代相右衛門１は江原進士兵衛の娘と結婚し、相右衛門が島原で戦死して妻は生家（江原氏）にもどり子を育てた。ためにその子の次郎右衛門からは江原姓を名のった。その子孫が喜右衛門２・３である。

ところで菅原姓江原江口氏系図によれば、江原石見守の孫（江戸前期）は江原喜右衛門１と江口重次とあり、この重次の子は平兵衛とある。

神代種元（①）の娘は江原石見守と婚姻しており、当時は養子縁組は親戚からもらう事が多かった。さらに当時は子孫は一般的に先祖の名や官職を名のる事が多く、江戸前期の江原喜右衛門１と江戸中後期の江原喜右衛門２・３は先祖と子孫と考えるのが自然である。どの点から見ても江戸後期・幕末の江原喜右衛門２・３は江原石見守の子孫と考えるしかない。江原進士兵衛と江原喜右衛門１は同じ人物で神代豊前守の子孫が江原石見守の名跡を継いだと考えられる。当時は同じ人物でもいくつも名があるために、注意深く見ないと読み解けぬまま埋没した歴史を見逃してしまう。



六、幕末の志士

神代豊前守の幕末子孫の江原喜右衛門３はやはり川久保邑神代家の家臣で物成二一石五升三合（元川久保団士族着到）、芦刈町三王崎（三条か）に居住していた。この人物は妻の浦浅子（註１）（浦氏は八戸宿の手明槍）との婚姻を通じて江藤新平（八戸の手明槍出身）と従兄弟だった。江藤新平の護衛や身の回りの世話をしていたと子孫（長崎）に伝わり、真木和泉や江藤と尊王運動に従事していたと芦刈町小路の福田寺（神代家菩提寺）にある墓碑に記されている（浦氏墓所もある）。江原は芦刈で唯一の志士であり、その妻は初代芦刈村長の横尾與一郎のおばだった。

乙宮神社の拝懸魚に楠木正成の菊水紋が彫られ（註２）ているのを元旦に見つけ神職や郷土史関係者に報告させて頂いた。幕末の尊王運動で祇園社（須賀神社）の裏には大楠神社（祠は昭和十年に創建）、龍造寺八幡宮には楠神社が創建され、菊水紋が用いられた。乙宮神社での菊水紋の彫刻には志士の江原喜右衛門３（神代邑家臣）が関係していると考えてよいだろう。この江原喜右衛門３（のち神代綏之）については『芦刈町戦国史』を参照いただきたい。

七、さいごに

江原石見守といえば神代勝利を語る時に必ず出てくる人物だが、その一族がこれほど小城市の歴史

に関わっていたとは驚きであった。芦刈には江戸後期には早すぎた勤皇思想家の横尾紫洋（註3）（川久保邑）、幕末に尊王の志士もいて、さらに「観瀾」小学校の出典も孟子で、明治前期には民党が強かった。芦刈の地下を脈々と流れる精神的水脈があったことが判る。この発見で芦刈史に新たな頁が加わり幸甚である。三日月町江口の江口氏の江戸時代についても地元会員に是非調査頂きたい。

（芦刈町芦溝居住）

参考文献
『羽生城と木戸氏』（冨田勝治）、『関東戦国史』（黒田基樹）、『享徳の乱・長享の乱』（水野大樹）、『横浜の戦国武士たち』（下山治久）他。『九州治乱記』は『肥前叢書』第二輯に拠る。なお本文中の系図は『芦刈町戦国史』（東統禅）所収系図を転載した。

（註1）
江藤新平の母の（浦）浅子は（浦）竹の姉で、その熱心な教育と漢学の素養で江藤新平を後代の偉大な国家建設者に育てた。浦氏の墓所も芦刈の神代家菩提寺にある。

（註2）
鬼瓦部分には神紋として少弐家の4ツ目結紋が彫られているが、小城藩の副紋でもある。

（註3）横尾紫洋は芦刈永明寺に幽閉されのち獄死した。同寺に供養塔がある。

小城における〝石〟の活用とその変遷(二)

本村　浩二

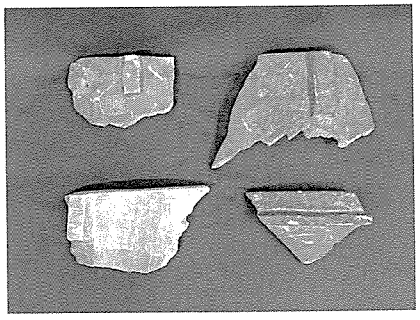
前号において旧石器時代から弥生時代まで小城市での〝石〟の利用を概観してきた。本号ではそれに続く古墳時代以降の石材の利用について述べていき、最後に各時代での小城と石との結びつきを考察してみたい。

古墳時代になると、首長墓の墓制としての古墳が出現する。三日月町織島の円山古墳は、古墳時代前期に比定される。昭和三十一年に内部の調査が行われた。石室は単室両袖型の古式横穴式石室であり、内部は板石等をはじめとする石室構造には阿蘇起源の阿蘇溶結凝灰岩が使われている。同石材は恣意的な目的があって阿蘇の地から石材が運ばれたと考えられる。

それに対して古墳後期（七世紀頃）に造営された横穴式石室をもつ姫御前古墳では内部の石棺が安置される石室の造営には周辺で採取された安山岩等が用いられた。

古代になると、丁永遺跡2区において丁亥年銘の刻書紡錘車が出土している。石材は片状蛇文岩と呼ばれる小城町岩蔵焼山で産出したものと考えられるが、市内で刻書のある紡錘車はこの一点のみであることから搬入品である可能性が指摘があることや関東地方で多く同様の紡錘車が出土していることから関東地方との共通点が指摘されている。関東から防人として派遣された人が製作したと考えられ、東国と小城との関係を窺わせる資料である。また近年では佐賀県下において刻書された紡錘車が出土したことが報告されており小城で出土した紡錘車の類例を得られている。

古代から中世において石製品が出土しているのは、三日月町金田に所在する社遺跡である。遺跡は、嘉瀬川旧河道の西岸に位置しており、古代から中世までの港湾の遺跡であると考えられる。遺跡の時期は古代と中世の二期にわかれ、古代に出土遺物も古代では、土師器と呼ばれる素焼きの土器にいろは歌を墨書したものが出土し、平仮名の普及について知見が得られている資料である。


社遺跡出土滑石製石鍋

社遺跡の石製品として挙げられるのは石鍋である。これは古代末から中世期にかけてつくられた鍋で滑石製である。市内では滑石の採掘場所はなく、近隣の採掘箇所を考えれば、長崎県西海市周辺で採掘されるのみである。

港湾の性格を持っていた社遺跡は、他地域の陶磁器また龍泉窯青磁碗などをはじめとする輸入陶磁器なども出土しており、その交易対象の一つが西彼杵半島であり、滑石製石鍋が小城に搬入されたと考えられる。

また中世後期になると、小城町松尾に所在する光勝寺や芦刈町芦溝に所在する小路遺跡などで五輪塔や宝篋印塔、板碑と呼ばれる石造物が作られた。

松尾山光勝寺は、小城町の市街地北部、標高七十五mの丘陵部に位置する。文保元（一三一七）年に千葉胤貞を開基として、九州で最初に建立された日蓮宗の寺院である。

発掘調査の結果、斜面に平らな面を五～六段程度つくり、そこに石塔を列状に配置していることが把握されている。また出土した石塔の石材は、一部は砂岩を含むが大部分が市内でも産出する安山岩である。

出土した石塔群は、五輪塔・宝篋印塔・板碑に分類することができる。石塔には遺骨を納める蔵骨器などの埋葬施設がなかったことや、生前供養を表す「逆修」といった文字が刻まれていたことなどから、墓塔としてではなく生前供養や追善供養の供養塔であると考えられる。

石塔に刻まれた法名からは人物の特定できなかったが、松尾山光勝寺が中世期に小城郡の惣地頭職にあった千葉氏の菩提寺の一つであることから、千葉氏やその家臣ら武士階級の供養塔の可能性も考えられる。

小路遺跡出土　五輪塔・宝篋印塔

小路遺跡についても中世後期（室町時代）の集落跡である。検出された遺構は、掘立柱建物群とそれを囲む溝、土坑である。この

溝に囲まれた空間の外から五輪塔や宝筐印塔が出土している。小路遺跡は、徳島氏に関連する居館跡と考えられ、中世後期における小城市南の居住と信仰の空間に一定の区切りがあることがわかっている。

近世になると小城町に所在する小城藩邸石橋や牛津町に所在するイッスイ井樋など石は建築部材として利用をされた。

小城藩邸の石橋の調査で、現状わかっていた石垣に加えて、絵図に描かれていなかった石垣が確認された。またその敷設年代は石垣の石積みの状況や加工技術から江戸時代の前期と後期の二つの時期に分けられる。その後改修が行われていたと推定されている。その石橋を含む周辺の整備には市内で産出する安山岩をはじめ、花崗岩石材が用いられた。石垣の石材には「大一」や「川」、「＋」などが刻印されている。これは石橋を敷設には石工集団が関与した証と考えられる。

小城藩邸の石橋調査風景

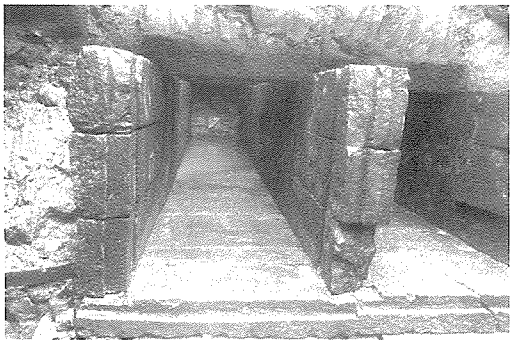
またイッスイ井樋は、長崎街道に敷設された農業用灌漑水路である。水路の調査が行われている。

芦刈水道は諸説あるが成富兵庫茂安によって築造されたものと考えられている。この水路は二連式の石組み水路である。石組みは、大型な板状のものが組み合わされており、石材は安山岩であると考えられる。先述した小城藩邸の石垣で見られた「＋」の符牒と呼ばれる刻印がイッスイ井樋でも確認されている［註一］。小城藩邸の石橋と同様に石工集団の関与が考えられる。

最後に小城市域においての石の利用について少し考察を加えまとめとしたい。

後期旧石器時代は、最終氷河期の寒冷な気候で狩猟対象の動物を追う狩猟採取の生活であった。遊動生活と小城で産出するサヌカイトが結びつき、石器製作を行った。

縄文時代には、環境変動とともに石器石材として黒曜石を多く用いた。市外の遺跡では腰岳以外にも九州内から様々な産地の黒曜石が出土している遺跡もあることから交易のネットワークが存在した可能性が考えられる［註二］。


イッスイ井樋の石組み

弥生時代には水稲耕作など大陸文化の波及により、石器に利用される石材も多様化した。いわば文化に石材が結びついたと考えられる。

古墳時代には中期に造営された円山古墳には阿蘇溶結凝灰岩が用いられている。それに対し後期に造営された姫御前古墳では、在地の石材で石室内を造営していることから、時代によって大和朝廷とのかかわりを古墳が示していると考えられる。

古代になると刻書紡錘車やいろは歌を墨書された土師器などが出土している。このことから文字という文化が地方へ普及した時期であると考えられる。それとあわせて交易において東彼杵半島から持ち込まれた石鍋などの滑石製遺物は港である社遺跡を集積地として小城へ持ち込まれたと考えられる。

中世には光勝寺などで確認されている五輪塔や宝筐印塔などの石塔群などから中世武士とのかかわりがあり、当時の死生観を考える上で貴重な資料である。

近世になると肥前鳥居や肥前狛犬などをはじめとする石造物が砥川や西川などに拠点を持っていた石工集団によって作られた。一方で石橋や水路といった建材としても利用されている。この時代になると石は道具としての利用より建材や信仰の対象として利用されていたと考えられる。

このように小城市内において時代の変遷と石について考察してきた。小城では古くはサヌカイトをはじめ安山岩を主とした石材が産出し、様々な文化と結びつき、他地域の石材を受容しながら石器文化・石造文化を形成していったことが読み取れる。

（三日月町久米居住）

［註一］
符牒について報告者は、石工集団の仕事を示す刻印である以外に石材加工時の寸法取りのためのものである可能性を指摘している。

［註二］
大分県横尾貝塚において、植物繊維を用いて編まれた縄文時代のかごの中から大量の黒曜石が出土しており、同遺跡が縄文時代の流通拠点として指摘されている。

令和二年度研究発表会

新型コロナウイルス感染症対策として参加者同士の密をさけるため会場をゆめぷらっと小城に変更して開催しました。

令和三年二月六日（土）十四時から開催し、三十五名の参加がありました。

四名の会員が『小城の歴史』81・82号の執筆内容について研究成果を発表しました。また眞子会長が「小城のあめ山」について発表しました。

【原稿募集】

『小城の歴史』の原稿を募集します。みなさまが日頃興味を持って調べた小城にまつわる事柄や、地域の方にしか知られていない伝承等をご存じでしたら是非、本誌で紹介して下さい。

題字揮毫
鎮西本山松尾山護國光勝寺
貫首　松島　日應氏

小城の歴史　第83号
発　行　小城郷土史研究会
会長　眞子　雅允
編集　城島　敏明
太田　正和
本村　浩二
発行日　令和三年五月三十日
印刷所　（株）音成印刷